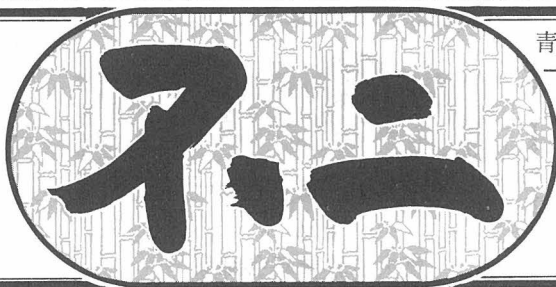


青年僧よ 立ちあがれ、歩め!!

発行所  
 臨濟宗青年僧の会  
 発行人 藤原東演  
 〒420 静岡市御幸門11の4  
 TEL 0542-51-1312  
 〒振替 横浜 2-16960



主 な 記 事

- \*毒 語
- \*禪門の「戒」
- \*生き生き寺院
- \*この人この道 山本慈昭
- \*結婚式法話
- \*お地藏さん

我が僧堂は午前三時の暁鐘（開静）から一日の行事が始まります。朝課、粥座、坐禅、喚鐘、作務、齋座、作務、晚課、薬石、昏鐘、坐禅、喚鐘、そして午後九時の解定、夜坐といった日課であります。但し摂心となれば作務を止めて提唱、坐禅、喚鐘となり、解定も十時となります。それらの日課は、総て鳴し物によって厳格に、如法綿密に行じてゆかれます。禅はまさにそのものであり、そこには分別も、理屈もなく、雲衲たちのひたすらで純粹な生きざまがあります。この事実こそが我が臨濟禅の命脈を保っているといっても過言ではありません。

私が平素親しくお付き合いをしている天台宗と浄土宗の住職がおります。その方たちは一様に臨濟宗には僧堂という厳しい修行の機関である道場があつて誠に羨ましい。雲衲方の凛々しい姿や礼儀正しい作法、きびきびした応対振りに接すると心が洗われますと云つて、時々我が子弟の教育のために、その子弟や家族を引き連れて相見にやつて来られます。

武蔵野の面影を求めて訪れる参拝者は静寂な境内に身の引き締まるのを覚えますといひ、境内を黙々と清掃している雲衲たちの姿に接して御苦勞さまでと手を合わ

せておられる初老の婦人方や晚課の時、誦經する雲衲たちの声に瞑目し、じつと耳を傾けてゆく若い人たち、凍てついた大地に素足に草鞋掛けの雲衲たちの托鉢行に頭をたれ喜捨する人たち等々、この雲衲のひたむきな一挙手一投足に人々は敬虔な心、信心を喚び起させるものがあるのではないでしょう。これが以身說法であり、生

# 基本に立ち返れ

平林僧堂師家  
 糸原圓應 老師



きた教化であります。そもそも仏教は出家道であります。釈尊をはじめ、わが祖師方の行履は悉く出家道の亀鑑たるものであります。昔から「一子出家すれば、九族天に生ず」といわれておりますが、ここでいう出家とはただ単に頭を剃つて衣を着るといった形の上だけのことではありません。しかし今日はそういう形の上の禅僧もだんだん少なくなつて

来ているような有様であります。真の出家とは俗世間の一切の執着欲望を断つて、専一に仏道を行ずる人というのであります。ところが現状は寺に住んで、寺を私物化し、俗世間と変わらない執着、欲望の渦巻く生活ではないでしょうか。禅僧として最も基本である坐禅もせず、看経も掃除、作務もしないといった現状を垣間見ます

と、我が禅界の将来に転た危俱の念を抱かしめられるのであります。中には本當に如法に勤められておられる禅僧方もお見受けしますが、そういう方は稀であります。このように感じ見ますれば、今日僧堂でひたむきに修行している雲衲こそが真の出家の姿であり、一番有り難い尊いことであると思ふのであります。

中峰和尚の「末世の比丘、形沙門に似て、心に慳愧無く、身に法衣を着けて、思い俗塵に染む。口に經典を誦して意に貪欲を思い、昼は名利に耽り夜は愛着に酔う。外持戒を表して、内密犯を成す。常に世路を営んで永く出離を忘す。偏に妄想を執し、すでに正智を

擲つ」という言葉に私たち禅僧は再三三考してゆく必要があると思ふのであります。

『興禅大燈師遺誡』に「一人あり。野外に綿絶し。一把茅底。折脚罽内に。野菜根を煮て。喫して日を過すとも。専一に。己事を究明する底は。老僧と日々相見。報恩底の人なり」と示されておられますが、このような生き方こそが真の出家であります。現代人はこういった僧の出で来ることを切望しておるのであります。名聞利害を離れ、修行の出来た真の出家を世間の人は望んでおるのであります。何も云わなくともその人の徳風に接しただけで救われ、敬うことの出来る禅僧を期待しておるのであります。お互い禅僧たるものは皆て僧堂に於いて、あのひたむきで純粹な求道心に憶いを起し、そこで生活し、体得したことを生かしてゆく、つまり禅僧としての基本に立ち返つてみることに肝要と思ふのであります。

とにかくお互い禅僧として如何に生くべきか、如何にあるべきかと、常に問題意識を持つことでもあります。併し問題意識それ自体一つの鉄壁であります。どこまでも厳しく真剣に取り組んで工夫してゆくならば、道は自ら開けてゆくものと信じます。どうぞ青年僧諸師方の今後一層のご精進を願つてやみません。